

坪井良治教授の御退任によせて

山梨大学学長
島田眞路

坪井良治先生、この度は御退任、誠におめでとうございます。18年間にわたる、東京医科大学皮膚科学分野主任教授の職を無事全うされ、ほっと一息つかれておられることと存じます。私も21年にわたり、山梨大学皮膚科学講座を担当し、次世代へ引き継ぐことができましたが、その道のりは決して平坦なものではありませんでした。

20世紀末から21世紀初頭の20年間、日本の医療や大学教育は大きな変革を遂げ、私共臨床系の医学部教授はその対応に追われました。とくに臨床研修制度により「大学から一般病院へ」というスローガンのもと医局という組織は弱体化し、臨床業務や卒後教育を行う上で、大きな荒波に直面した場面も数多くありました。更に、新専門医制度という「学会否定のコンセプト」でアカデミアを直撃されるという事態となりました。私はこれを日本医療界の文化大革命と称しています。しかし、坪井教授は、持ち前の体力、明晰な頭脳、冷静な判断力で様々な問題を難なく乗り越えられ、医局員数を増やし、医局を隆盛させてこられました。

さらに、坪井教授は東京医科大学病院の病院長をお務めになられ、2019年7月に開院した新病院の建設においても大きな貢献をされたとお聞きしております。私も山梨大学病院の病院長を務めた経験がございますので、院長職が激務であることはよく承知しております。院長職をいかに誠実に執行しようとも、病院内で起こる、診療関係、人事関係のトラブル、病院へのクレームなどは完全に防止することはできず、私もこれらの問題の対処に奔走したことを今でも思い出します。看護部長や薬剤部長を兼任することで問題解決に至ったこともありました。中でも看護部長を更迭し、兼任して師長会なども取りしきった病院長は私のみと自負しております。

私は院長としての6年間、謝罪会見を行ったことは一度だけありましたが、坪井教授はその経験がないとのこと。もちろん、運不運はありますが、大きな事故や問題がなく、院長職を全うできたことは、坪井教授の卓越した危機管理能力によるところが大きいと思います。

坪井教授のご専門は毛髪疾患、創傷治癒、真菌症であり、私の専門である免疫学とは異なるため、学会などで一緒に議論したり、共同研究を行ったりすることはあまりありませんでしたが、皮膚潰瘍治療薬の開発に大きな足跡を残されておられ、私もその業績をよく存じております。また、現在のように microbiome の研究が隆盛を極めるかなり前から、マラセチアと皮膚疾患の関係に注目し、斬新な研究成果を上げておられ、私はその先見性に対して敬服しておりました。さらに基礎研究のみならず、男性型脱毛治療薬、抗真菌薬の開発も手がけられ、臨床皮膚科学の発展に多大な貢献をされております。

これまで、坪井教授は日本皮膚科学会東京支部支部長、日本美容皮膚科学会理事長、日本医真菌学会理事長、毛髪科学研究会代表世話人を歴任され、調整力・管理能力の高さを示されておられますが、現在も日本褥瘡学会理事長の要職にあり、学会のさらなる発展のため、ご尽力されているとお聞きしております。私は日本皮膚科学会理事長を昨年まで6年間務めました。坪井先生には色々とお世話になり感謝しています。

坪井教授には私の主宰していた教室の原田和俊講師を准教授として迎えて頂きました。当時、突然の坪井先生のお申し出に大変驚きました。原田君の臨床能力、研究能力、人柄を高く評価して頂いているとのことで、東京医大にお世話になることになりました。卒後20年の途中入局ではありましたが、東京医大の医局員の先生方に温かく迎えて頂いたようで、坪井教授のご指導のもと、彼自身とても仕事がやりやすいと申しておりました。原田君は極めて臨床能力に優れ、また基礎的研究にも熱心に取り組み、山梨大学でも数々の成果をあげました。特筆すべきは彼の温かい人柄と卓越した指導力で医局員の評判も極めてよく、山梨大学の教室をリードしてくれました。原田君が貴学に転出すると聞き、私は彼を慕う数名の若い医局員から随分と批判されたことも思い出します。原田君が貴医局でも目一杯仕事ができるのも、坪井教授のお心遣いによるところが大きいと思われ、改めて深く御礼申し上げます。

最後になりますが、東京医科大学皮膚科の長い歴史における、中興の祖ともいえる坪井良治先生の今後益々のご発展を祈念いたします。